

## 研究生活のためのインフォマティクス【第3回】

# セルフアーカイビングのすすめ かわいい著作には旅をさせよ

轟 眞市

物質・材料研究機構 光材料センター\*

Shin-ichi TODOROKI

調べ物するならまず検索、という世の中になって久しい。自分の良く知らないことを調べるなら、まずは日本語で検索するのが普通であろう。研究稼業の標準語は英語であるにしても、手っ取り早く知識を得るのに母国語の手軽さは捨てられない。

翻って考えるに、自分の研究成果を知ってもらうのにも言葉の壁は存在する。英語で原著論文を書き上げても、読んでくれるのは専門分野に近い研究者だけだ。専門家集団の枠を越えて自分の仕事を知ってもらうには、まず言語障壁の無い日本人をターゲットにするのが第一歩である。そのためには、和文雑誌等に記事を寄稿する機会を得たら、それを最大限活用すべきだ。出版社の権利を侵さない範囲で、原稿ファイルをインターネット上で公開すれば、読者は検索エンジンが連れてきてくれる。

このセルフアーカイビングを手助けするサービスが、最近手軽に利用できる様になった。大学などの研究機関に所属している人であれば、機関リポジトリを利用すれば良い<sup>†</sup>。そうでない人なら、YouTubeの文書版と形容される scribd.com が便利だ。本稿では、筆者が数年前から取り組んでいるセルフアーカイビングの効用を紹介する。

## ホームページへのアクセスとの関係

筆者が自分のホームページを開設したのは1995年末のことだ。その後、2000年頃からセルフアーカイビングを始めた記録が残っている。図1に、ホームページへの累積アクセス数を、累積論文数(和英別)

とともにプロットしてみた。一見、相関するのは当り前の様に思えるが、細かに見てみると、興味深い特徴が浮かびあがってきた。

2007年7月、とある学会の会報に、研究発表に関するノウハウをまとめた記事[1]を発表した。発行と同時にホームページ上でも公開し、この記事に興味を持ちそうな人の集う掲示板に宣伝を載せてみた。その結果、その月のアクセス数は、普段に比べ約700も多くなったのである(図1の矢印(1)参照)。その雑誌の公称発行部数は6000部であるから、1割強の読者を追加で呼び寄せたことになる。彼らが紙媒体でその記事を目にすることはまず考えられないので、電子公開した甲斐があったのである。

セルフアーカイビングされた記事を見て、動いてくれた人も現れた。図1の2007年2月から始まる黒丸のプロットは連載記事[2]の発行を示している。この話を最初に持ち掛けてくれた編集者は、過去の筆者の記事(おそらく矢印(2)と点線で繋いだ2つの記事)を読んだことがきっかけ、と話してくれた。これが縁となって、連載物を執筆する機会が出版社を変えて現在まで続いている。各記事には過去の和文記事をURL付きで引用したので、自然とホームページへのアクセスが増えていった。

図1の 印を結ぶ線で示される、査読無し和文記事の累積数の増加傾向は、実線で示されるホームページへの累積アクセス数と、2006年後半以降において良い相関を示している。一方、査読付き英文原著論文(筆頭著者分)の累積数を示す 印の線との相関は見られない。原著論文を読んで引用文献(当然英語!)を引くのに、筆者のホームページを経由することを試みる人はほとんど居ないであろうから、当然のことである。

\* 〒 305-0044 茨城県つくば市並木 1-1

fax 029-854-9060

URL: [http://www.geocities.jp/tokyo\\_1406/](http://www.geocities.jp/tokyo_1406/)<sup>†</sup>我が研究機関においても今秋、独 Max-Planck Digital Library と共同で試験運用が始まっており、大いに期待している。

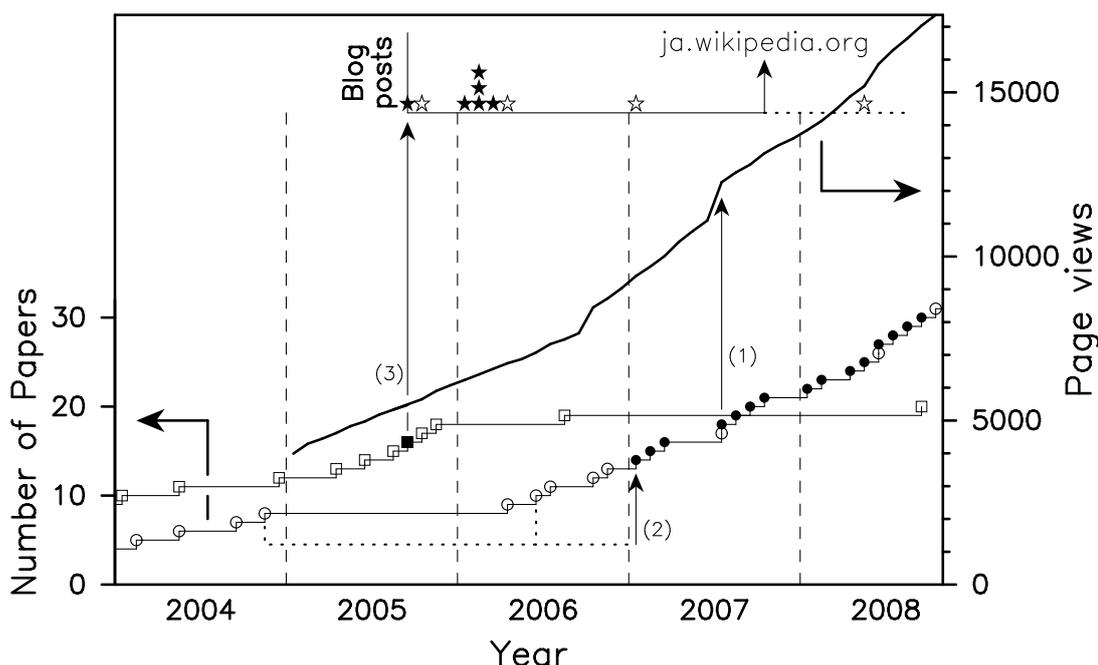


図 1: 筆者のホームページへの累積アクセス数 (太実線、右軸)、筆者の英文原著論文 (筆頭著者分、査読付き) の累積数 (印、左軸)、および筆者の和文記事 (査読無し) の累積数 (印、左軸; は連載記事)。上部の印は、文献 [3] (印) を紹介してくれたブログの記事の数を示す。(1)~(3) の縦矢印は、データ間の相関を示す (本文参照)。

## 翻訳の効用

2004年12月、材料インフォマティクスの国際ワークショップで実験ノートの電子化について発表し、そのプロシーディングス (査読済、英文) [3] が2005年9月にオンライン公開となった (図1の印)。日本人にも広く読んで欲しかったので、早速和訳して公開したところ、3人の日本人ブロガーが紹介してくれるに至った (図1の印)。これらのブログへのリンクを取りまとめて、ホームページに掲載しておいたのが功を奏したのか、2007年10月にはフリー百科事典『ウィキペディア』の「実験ノート」項目にも取り上げられることとなった。

さらに、これを見た言語学先攻のポスドクの方が、自らのブログで紹介してくれた (2008年5月)。論文のテーマが材料科学に閉じていない内容であったからこそ、専門分野の壁を越え易かったのだろうが、和訳を公表していなければ、文系の方々にも読まれていることを知る機会は無かったであろう。

セルフアーカイビングはまず母国語の文書から取り組んだ方が、反響を知り易いと思う。反響を知れば、励みになる。筆者はこれに味を占めて、和文記事

の英訳も公開してみた [4]。15ヶ月後ではあったが、スペイン人ブロガーの目に留まったのだから、セルフアーカイビングは止められない。

### [参考文献]

- [1] 轟 眞市：“研究業績リストの電子化 研究者のための執筆・発表支援システム”，セラミックス, **42**, 7, pp. 520–524 (2007).
- [2] 轟 眞市：“セレンディピティの磨き方 ファイバヒューズ研究に至った縁と偶然 (連載全3回)”，工業材料, **55**, 2~4月号 (2007).
- [3] S. Todoroki, T. Konishi and S. Inoue: “Blog-based research notebook: personal informatics workbench for high-throughput experimentation”, *Appl. Surface Sci.*, **252**, 7, pp. 2640–2645 (2006).
- [4] S. Todoroki: “Two serendipitous episodes — How I embarked on fiber fuse research”, (2007).

上記文献は翻訳を含めすべてセルフアーカイビングされています。タイトルで検索してみてください。